

2015年(平成27年)

4/2 (木)

Thursday

きょうの

発言

「街は火の海、夢中で逃げ、どこを通ったかも覚えていない」。現在84歳になる父親から熊本大空襲の体験を何度も聞きました。足元に目をやると玉名市南部の水田地帯には、集落を移転させ、美田を埋め、73年前に飛行場が造られました。当初は訓練用で、正門には「陸軍大刀洗飛行学校玉名教育隊」の看板が下げられ、地元では今も愛着をもって、大浜飛行場と

高谷 和生 <まもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク事務局長

## 大浜飛行場との出会い

呼ばれています。民家裏の格納庫跡の壁には無数の爆弾が破裂した痕跡があり、正門には当時のまま金具等も残されています。確かに「郷土玉名にも戦争があった」と感じた瞬間でした。私が初めて戦争遺跡と出会ったのは13年前、この大浜飛行場でした。弥生時代など考古学の調査研究から離れ、学校現場で玉名や荒尾地域に残された近現代の歴史や遺跡に注目したのが契機でした。

県内の基礎調査に5年間を費やしました。熊本には数多くの戦争遺跡が残され、空襲・戦災の被害、連合国俘虜をはじめとする加害の歴史とも向き合いました。地元の有明中学校では、地域・平和学習として毎年1年生にフィールドワークを催し、昨年で5回を数えました。飛行学校の教官だった地元古老の証言を通し、平和の大切さを子どもたちに伝えていきます。戦後70年。戦争遺跡は私の中で戦争遺産へと、多くの出会いを糧に深化しています。

2015.4.2